

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第991号 平成27年9月1日

遠友夜学校

札幌には、かつて「遠友夜学校」という塾がありました。

この「遠友夜学校」は、5千円札の肖像としても有名な新渡戸稲造氏夫妻が、貧しさから教育を受けられない若者たちのために、明治27年（1894年）、現在の札幌市豊平橋付近に開いたもので、札幌の歴史にとっては財産ともいえるべき存在です。しかし、札幌市民の間には良く知られていないようで、残念に思っています。その関心の薄さは、札幌資料館（大通西13丁目）2階の展示室で展示されていた「遠友夜学校」に関する資料類の全てが平成26年7月に北海道大学に移管された際、その事が一部の人を除いて殆ど話題にならなかった事でも分かります。

新渡戸稲造氏は、1862年（文久2年）9月1日、盛岡藩士の子として生まれます。

札幌農学校（現北海道大学）卒業後アメリカやドイツに留学し、農学、経済学等を学ぶと共に、帰国後は札幌農学校教授となります。その後、体調を崩し、米カリフォルニア州で療養しますが、その間に「武士道」という本を出版し、広く世界に日本の伝統的な道德教育について紹介しています。



新渡戸稲造氏（盛岡市先人記念館資料から）

後に、新渡戸氏は国際連盟の設立時に、その深い学識と高潔な人格のため事務次長に推され、スイスに渡り連盟の発展に尽力されました。

さて、札幌に開設された「遠友夜学校」は、上述の通り、新渡戸氏夫妻が、貧しさのゆえに学校に行きたくとも就学出来ない子ども達のために私財を投じて創設したものです。

高倉信一郎氏によれば、新渡戸氏が夜学校の設立を構想されたのは、20歳を過ぎた明治15、6年頃という事ですから、ヒューマニストであり、熱心なクリスチャンであった青年新渡戸の理想が、10数年の歳月を得て花開いたといえましょう。

夜学校の教育方針は、一言でいえば「学問より実行」という事ですが、これは、私流に理解すれば、知識を覚える事によしとするのではなく、世の中の役に立つ力を身に付ける、つまり、実学教育というところにあっただのであろうと思っています。

夜学校は、社会事業に深い理解を持つ人々の寄付金等によって賄われると共に、新渡戸博士の意志を継いだ北海道大学の学生がボランティアとして教育を担い、1944年(昭和19年)に閉校するまで、約5000人の人々が学び、約1000人が卒業したといわれています。

遠友夜学校は既にもありませんが、貧困等様々な事情で学校に通えない人に学びの場を提供しようという新渡戸氏の精神は、今日においても、自主夜間中学の「札幌遠友塾」等の活動へと受け継がれているように感じています。

現在、戦後の混乱や不登校等様々な理由で義務教育を修了していない人が全国に約13万8000人もいるとの事で、その多さに驚きます。また、道内では、義務教育未修了者が7000人を超えており、しかも、これは大阪府に次いで全国2番目の多さといえますから、二重の驚きです。

こうした中、道内では、「札幌遠友塾」をはじめ4校の自主夜間中学が、それぞれ義務教育を修了していない人に対して学びの場を提供していますが、それらはいずれもボランティア活動として行われていますので、新渡戸氏が創設した「遠友夜学校」と同様、卒業しても卒業資格が与えられるような事はありません。

こうした自主夜間中学の活動は、大変貴重で、意義あるものですが、道内だけでも義務教育未修了者が7000人を超えているという現実に対しては、その活動は極めて限定的です。

こうした事から、現在、大阪府や東京都等8都府県では、自主夜間中学とは別に公立の夜間中学を設置しています。現在その数は31校となっていますが、文部科学省では、各都道府県に1校以上公立夜間中学を設置するよう求めています。

道内には公立の夜間中学は有りませんが、北海道と札幌市では、共に義務教育未修了者に対する公立の夜間中学設置に向けた検討会議を今秋にも立ち上げ、教育ニーズがどの位あるか、教育課程や教員配置をどうするか等について検討していく意向にあるようです(8月14日付北海道新聞から)。

如何なる理由であれ、義務教育未修了者が多いという現状は、看過できる状況ではありません。

教育行政としては、本来は、義務教育未修了者を出さないための方策をしっかりと講じて行くべきだと考えています。公立夜間中学の設置は、「もう一度学び直したい」という多くの義務教育未修了者の強い思いに応える意味でも重要だとは思いますが、義務教育未修了者を出さないための方策を講じなければ、公立夜間中学の設置は、現状固定の対処療法に過ぎなくなりはしないでしょうか。

北海道や札幌市には、その事を踏まえた上で、義務教育未修了者の教育ニーズに応えるためにも、早急に夜間中学の設置について検討を進めて頂きたいと思います。

(塾頭 吉田洋一)